「神のかたち」で生きる霊性入門

連載 8

自由を鍛える ― 神の創造物としての尊厳

池田モース優美
いけだ・モース・ゆみ：二〇一九年、米バイオラ大学タルボット神学校パストラルケア&カウンセリング修士課程修了。セカンドレベルミニストリー、ソウルケア部門ディレクター。クリスチャンの霊性、精神的支援のほか、霊的虐待、カルト化教会被害者の回復支援を行っている。

「神のかたち」を自分自身の生活の中に形作る、というテーマでお届けしています。

自由の対価

ある二人の方のことばをご紹介します。

Aさん「私は単に利用されているだけだということはわかっています。役に立たなければ、罵られることさえあります。でも、今の生活を続けたいと思うので、結局、従ってしまうのです」

Bさん「私は会社のオファーを断り一人で活動しています。もしそれを受けていたら、重要な地位についていたかもしれません。しかし、聖霊の導きに従って働く自由が欲しかったのです。今は組織の支援も肩書きもないので大変です。でも、これで良いという確信があるのです」

時々、自由の対価とはなんと大きなものかと思います。信仰の自由のためにアメリカ大陸へと渡った新教徒、女性解放運動、ガンジーによるインド独立運動、公民権運動、天安門事件等々…自由のための道のりは、迫害と弾圧の歴史です。

私たち個人の自由への道も、楽ではありません。Aさんは生活の保証を得ていますが、自らの心は、自分が真に自由でないことを知っています。一方、自由のために整備された道を降り、あえてでこぼこ道を行くBさんのような人もいます。

私たちの自由

私たちは自由でしょうか。もちろん、現代の日本に生きる人々は奴隷ではありません。良心的で誠実な信仰者は、神の子どもとして自由の恵みを体験しているでしょう（ヨハネ8・31―36）。

しかし、そのように比較的自由が保証されてはいても、さまざまな人々の価値観と思考の流れをたどるとき、自由とは言い難い、魂を閉じ込めている何かを感じることがあります。人としての尊厳を無視するような価値観、奴隷になれ、とささやきかける声です。

たとえば保証された生活、人々からの称賛・承認…。これらは人を導く羊飼いではなく、奴隷監督になることがあります。奴隷監督は、私たちが彼らを満足させれば受け入れますが、そうでない場合、私たちに価値はない、とささやきます。

キリストの自由

ではイエス・キリストは、どのような自由を選択したでしょうか。それは、荒野の誘惑に見ることができます（マタイ4・1―11）。イエスはパンよりも神のことばに従って生きることを選びました。そのため、キリストの肩書きは「大工の息子」となり、生涯、貧しく、休む家もない人として生きました。それは世の中が与える財産よりも自由を選んだ結果です。そしてついには、十字架の上で体の自由までも失います。しかし私たちの魂は、それでもキリストが真に自由であるということを知っています。

悪魔や人間が課す檻は、神の霊を閉じ込めることはできません。キリストは、神であることの尊厳と自由を地上の富と引き換えにはしませんでした。

自由のために、あなたの尊厳のために

「私はいつになったら受け入れられるのだろう」「失敗して、若さ、学歴、仕事、配偶者、富の競争に出遅れた。私には価値がない」。このような考えが、多くの人の心を深く虫ばんでいます。背景にあるのは、日本人を苦しめる一つの強固な精神性、「比較」です。

自分自身にある絶対的な価値を認めていないため、他者との比較、社会の価値基準の中で自分の価値を確認します。その状態は、「勝ち組」でも「負け組」でも、何らかのランクを絶対視していることに変わりなく、番付という奴隷監督の下にあります。

仮に自分が「負け組」だと信じる人は、比較の物差しの中では、永遠に底辺の「奴隷」です。興味深いことに、この傾向をもつ人は、自分自身を奴隷にする虐待的な奴隷監督の元に自ら留まり続けます。自由になるためには、外には自由な世界があること、そして自分がどのような価値観の奴隷になっているのかに、気づく必要があります。

もし、心の中の「あなたは奴隷だ」とささやく声に出合ったなら、自由になってほしいと、心から願います。自由に空へと羽ばたいてほしい。神のかたちを表す被造物として、自分自身の尊厳を大切にしてほしいのです。

魂の自由

一九三〇年代、日本で六年間、宣教活動に従事し、その遺品が今も長崎に残るマキシミリアン・コルベというカトリック司祭がいます。彼の最期はアウシュビッツでの処刑によるものでした。

四一年、コルベ神父はナチスの監視下、他の収容者たちと強制労働に服していました。ある日、同じ班から行方不明者が出ると、ナチスはそれを脱走と見なし、連帯責任として同じ班から無作為に選んだ十人を処刑すると決めました。選ばれたうちの一人が突然、もう妻と息子に会えないのか、と泣き崩れます。その時、この囚人の身代わりになりましょう、と進み出たのがコルベ神父でした。

十人は餓死室に閉じ込められ、餓えと渇きに苦しみます。コルベ神父は一人一人を励まし、賛美歌を歌い、息を引き取っていく仲間たちのために祈りました。二週間後、コルベ神父を含め四名はまだ生存していましたが、フェノール注射により処刑されました。

この犠牲の物語は、コルベ神父の最期の場面に立ち会った人物の貴重な証言により語り継がれることになりました。この証言がなければ、偉大な信仰の英雄の物語は、歴史の波に消えていたかもしれません。しかし、たとえ記録に残らなかったとしても、コルベ神父が地上で表した霊的なメッセージの尊さは、天の国に記録されたでしょう（黙示3・5）。

あなたの物語、自由と尊厳のための道筋は、誰にも知られない物語かもしれません。自分を救うためだけの、小さな物語かもしれない。それでも、あなたの奮闘を通して、キリストの自由が世界へと流れていきます。

私たちの魂に絡みついているものが何なのか、よく考えてみてください。人としての尊厳、人間性を奪う鎖から自由になってください。高い対価を払うことになるかもしれませんが、自由、そして尊厳は、その対価に見合うものなのです。非常に高価な輝きを放つ生き方なのです。